

Inventory of Zenichi Kawazoe Scrapbooks

Scrapbook No.: BOX 27 #1

Scrapbook Title:

Primary Date range: 1961~1965

Dates outside of range:

Eastern sequence:

Western sequence: YES ^{JAPAN}

Contents description: BICYCLE RACE, THE GREAT FIRE AT HAKODATE (HOKKAIDO, JAPAN)

ONE ARTICLE WRITTEN BY KAWAZOE

Inventory of Zenichi Kawazoe Scrapbooks

Scrapbook No.: BOX 27 #2

Scrapbook Title:

Primary Date range: 1948

Dates outside of range:

Eastern sequence:

Western sequence: (H)

Contents description: * LIFESTYLE OF LOCAL JAPANESE, HAWAIIAN FOOD, ALCOHOLIC BEVERAGES IN HAWAII, HAWAIIAN WORDS, JAPANESE IMMIGRANTS, HAIKU OF HI

* ENTERTAINMENT, RICE & SUGAR,

NEWSPAPERS: HAWAII TIMES

(Mixed)

1961-1965

Gift of K. Kawazoe
3/89

Scrap books

Add to: Hawn Rave
(per M. Chow)

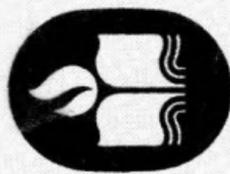
Fumigated - Jan. 1989

Bookplate
Attached

he makana ā

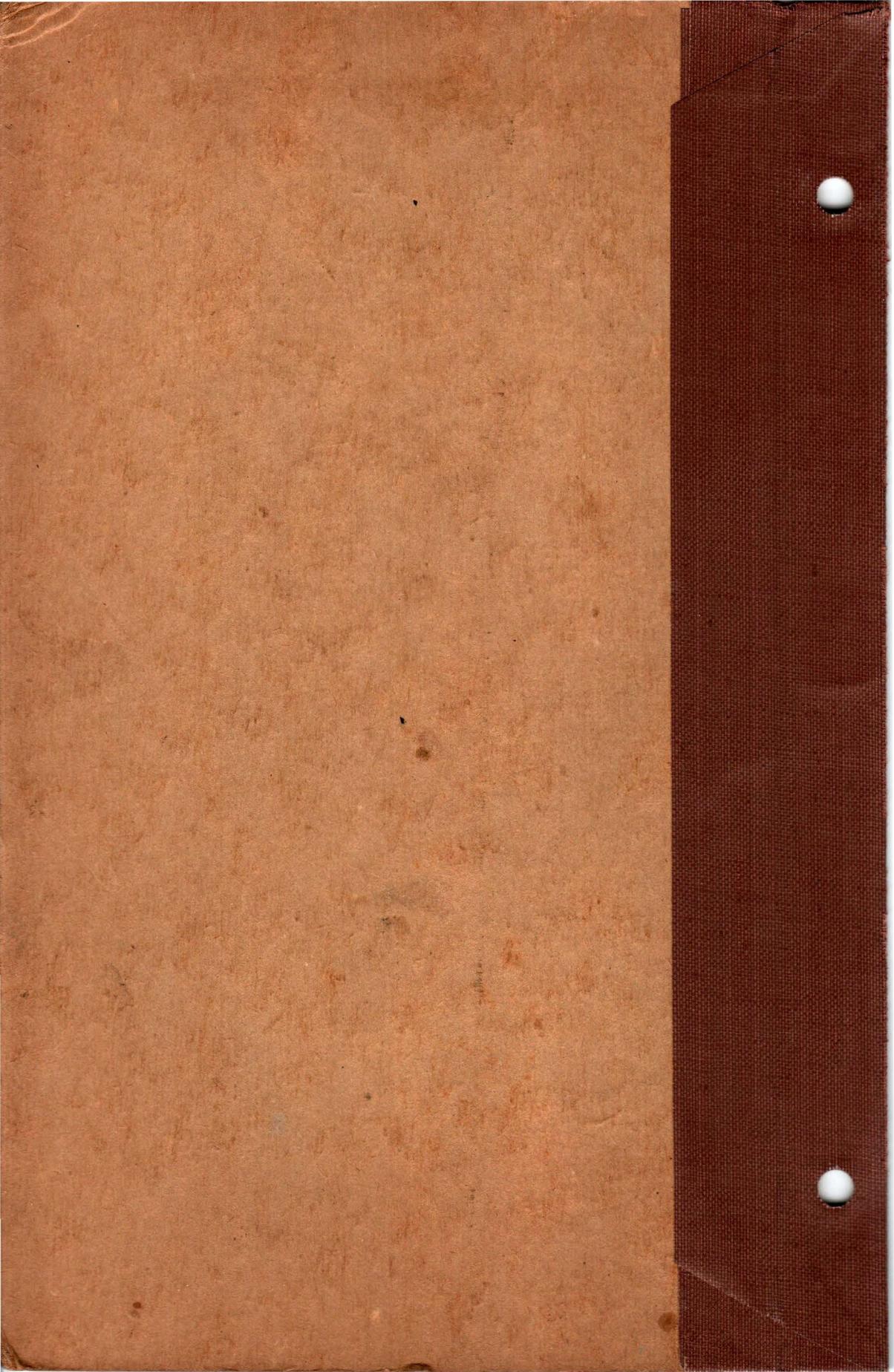
University of Hawaii at Manoa Library

Kenpu KAWAZOE



21
h

BOX 27 #1



私は騎馬というものを殆ど全く知りません。競輪といふのは全く知らず。ただ騎馬は、イギリスのエリウムで本物のタービッド騎馬を見たことがある。それが唯一の経験である。その後ちかぢかではテレビで写すから騎馬の様子をよく知つてゐるが今は気がするけれど

窓を開いて



福原 麟太郎

(4)

と考へてみれば本當の騎馬は一度しか見たことがなかつた。

競輪に至つては、本當に一度も見ない。話にならぬ。この間、オリムピックスのとき自転車競輪技がうまな子に比べて、こゝろのちかぢか盛ん

な競輪なるものかど、むすむすに感心した。よほど何か細かな計算があるのであつたが、斜面をまっしうらに曲線を描いて駆け下りるなまなりルがあつて、本ものを一へんみたいと思つた。もしこんななりルを味つために見物人が集るなら、むむむむと思つた。しかし別々のスタートを切つて、途中の議論に時間が出て遅速を競つ競技、あれは何と云ふのかわらないが、ただ計時を比較するだけの面白さのみに思へず、つまらないと、あと見なかつた。しかしあれもきつと、何かのかけひも戦術があつて面白さのにもあるに相違

自転車競走

ないと考へたが、とにかく私のように始めてみるものには単純であつた。

私の叔父は道楽者で、金持の商家の一人息子に生れ、わがままで、酒のみの乱暴者で、早く五十歳位で死んだが、京大阪のあたりに住んでたところ、ちよつと金持になつて叔母に金の指輪をいくつも買つてやつたりした。そのころは、おそくからの騎馬場の事務員をしていらした。若いとき二十歳くらいの年頃には、また郷里の備後国の海岸の小な町にいて、自転車が好きで、ヒヤスという自転車乗り廻して

た。また小学生の私を乗せて走つてくれた。それは明治三十年代で、日露戦争のすぐ前であるが、村祭はあつた。自転車競走のついでをした。いまの競輪のついでで、トラックを前開して二等三等を走らぬ、徒競走のついでなつた。叔父はついでに、颯爽としてヒヤス号に乗り出動して、賞品をとりつた。現に私がいまも叔父が取つてくれたメタル一箱の形をした小さな銀メタルで、中にヒヤス自転車会が贈つたついでなつた。きほのになつた。時計の鐘につけるメタルである。

—をこゝろに持つてゐる。

そういう競走のときは、自転車のハンドルを逆にして、身体を曲めてメタルを踏むというのがいられてた。その頃は軍隊といふものがあつて、行軍には自転車隊が伝令をしてた。たまに叔父の家の前で軍隊が休憩してると、叔父は自転車隊の人をつかまえて、どうして、ハンドルを逆さにつけるのです、これは早く走れまい、など質問してた。軍隊では、ハンドルをあたりまへにして、手さかちをついて、姿勢を正してみな乗つてたのである。

(注)オリムピックス—オリムピックス・ゲームスの略

スーパースポーツ自転車競走

女子の自転車競走のついでに、

おれれれ一年を競走

私は騎馬というものを殆ど全く知りな。競輪といふのは全く知らな。ただ騎馬は、イギリスのエリウムで本物のタービッド騎馬を見たことがある。それが唯一の経験である。その後がどうもはしりて写すから騎馬の様子をよく知つてゐるが今は気がするけれど

窓を開いて



福原 麟太郎

(4)

とも、考えてみれば本当の騎馬は一度しか見たことがなかつた。

競輪に至つては、本当に一度も見ない。話にならな。と。この間、オリムピックスのとき自転車競

な競輪なるものかど、ひたすらに感心した。よほど何か細かな計算があるのであつたが、斜面をまっしうらに曲線を描いて駆け下りるなはスリルがあつて、本ものをへんみたいと思つた。もしこんなスリルを味つために見物人が集るなら、むむもないと思つた。しかし別々のスタートを切つて、途中の議論に時間が出て遅速を競つ競技、あれは何と云うのかわからないが、た計時を比較するだけの面白さのうちに思つて、しまつな。と、あと見なかつた。しかしあれもきつと、何かのかけひきも戦術があつて面白かつた。これもまた相違

自転車競走

ないと考えたが、とにかく私のように始めてみるものには単純であつた。

私の叔父は道楽者で、金持の商家の一人息子に生れ、わがままで、酒のみの乱暴者で、早く五十歳位で死んだが、京大阪のあたりに住んでたところ、ちよと金持になつて叔母に金の指輪をいくつも買つてやつたりした。そのころは、あそこの騎馬場の事務員をしていらした。若いとき二十歳くらいの年頃には、また郷里の備後国の海岸の小なな町にて、自転車が好きで、ヒヤスという自転車を乗り廻して

スーパースポーツ自転車
競走

た。また小学生の私を乗せて走つてくれた。それは明治三十年代で日露戦争のすぐ前であるが、村祭はあつた。自転車競走のついでをした。いすの競輪でいふ、トラックを前向して二階三階をまぐる、徒然競走のよなり方であつた。叔父はそれを見て、興奮してヒヤス号に乗つて出動して、賞品をもらつた。現に私がいまも叔父が取つておくれたメタル一箱の形をした小さな銀メタルで、中にヒヤス自転車全社協賛といふ文字が浮きほらになつてゐる。時計の鐘につけるメタルである。

—をひかへて持つてゐる。そのころ競走のときは、自転車のハンドルを逆にして、身体を曲めてメタルを踏むといふのがいとされてた。その頃は軍隊といふものがあつて、行軍には自転車隊が伝令をしてた。たまに叔父の家の前で軍隊が休憩してると、叔父は自転車隊の人をつかまえて、どうして、ハンドルを逆さにしつてんのです、これは早く走れまい、など質問してた。軍隊では、ハンドルをあたりにまいて、手さかちをその上の方にして、姿勢を正してみな乗つてたのである。(注)オリムピックス・オリムピックス・ゲームスの略

女流の自転車競走の由縁、打撃、自転車競走の由縁

おれは一年前競走
自転車競走の由縁
打撃の由縁
F5 自転車競走

July 7 1961

ゴニツブ

函館大火

石川啄木日記から

函館の青柳町こそ悲し

友の戀歌
矢ぐるまの花

私は啄木ファンで、わざ／＼その遺跡のある釧路にも行つたし、函館も訪れましたが、現實の青柳町などつまらないものでした。札幌出身で、現在マノアに住むという一軍人花嫁からの電話であつた。啄木の北海道の生活は、この函館に始まるわけだがその日記を読むと、函館生

活も前後四カ月に過ぎない。啄木が妹の光子さんを同伴、初めて函館の土を踏んだのは明治四十年（一九〇七）の五月五日にて、啄木、時に二十二歳、それから約四カ月の後の九月十三日には、早や函館を捨て、翌十四日には札幌の人となつている。

この間、五月十一日から同三十一日までの二十一日間、函館商業會議所の書記六月十一日から八月十七日まで約二カ月間、區立彌生尋常小學校の代用教員、八月十八日から同二十五日まで八日間、函館日々新聞の記者をつとめるなど、約四カ月間に三度も職を轉じており、その氣まぐれさを遺憾なく發揮している。この函館での日記は五月十一日に始まり、今日から函館商業會議所に出ることになつた、割りつけられた役目は税務署へ行つて、同所議員の選挙名簿を作るため、区内商業者の住所、氏名、及び納税額を台帳から寫しとつて来るのだ。函館を觀光した者は、誰も聞いたであろうが、バヌ嬢は一聲高くこの會議所跡のことを説明してくれるのである。函館の第一夜には、四人で歌會などやっているが、一人何處かに行つて、泣きたい程、遊民村が戀しかつ

た、とも書いている。函館商業會議所の日記が六十錢、彌生尋常小學校代用教員の月給が十二圓などとも書いてある。文藝雑誌紅首宿（べにまごやし）の主筆に祭り上げられた事、大森濱で生れて初めて水泳をしたことなども、啄木にとつては大きな出来事だつたらしく、寧ろその稚氣には微笑を禁じ得ない。啄木が生れて初めて水泳をした大森濱も、實際に觀光パスの上から見ると、妙に薄汚い蝦夷地の一海岸に過ぎない。啄木の函館の生活中、何んといつても一番大きな出来ごとは、僅か六時間に

て市街の三分の二を焼失した八月二十五日夜の大火でその日記には、
：學校も新聞社も皆焼けぬ、友並木君の家も亦焼けぬ、予が家も危かりしが漸くにしてまぬがれたり。：
八月二十七日 曇
かの夜、予は實に愉快なりき、愉快といふも言葉當らず、予は凡てを忘れてかの偉大なる火の前に叩頭せむとしたり、一家の危安毫も予が心にあらざりき。幾萬圓を投じたる大厦高樓の見る間に倒れるを見て予は寸毫も愛惜の情を起すことなくして心の聲のあらん限りに快哉を絶叫したりき。：
これだけ讀むと正氣の沙

汰とは思えぬが、啄木は啄流に、この大火を
：大火は函館にとりて根本的の革命なりき、函館は千百の過去の罪業と共に燒盡して今や新しき建設を要する新時代となりぬ、予は寧ろこれを以て函館のために見ている。
：この函館に来て百二十有餘日、知る人一人もなかりし我は、新しき友を多く得ぬ、我が友は予と殆んど骨肉の如く、又或る友は予を戀ひせんとす。これが函館を去らんとする啄木の哀感だが、一方彼は彼自身を客觀して一種の樂しみを覺ゆ。と書いて

July 7 (櫻)

